

前[◇]世[◇]で辛い思いをしたので、
神様が謝罪に
来ました

God came to apologize
because I had a hard time
in the past life



3

初昔茶ノ介

Chanosuke
Hatsumukashi

ミシュリーヌ

謎に包まれた組織
リベリオンの幹部。
フランの両親とは
旧知の仲らしい。

フレル

アルベルト公爵家の
次期当主。
有能なイケメンで、
領民からの信望が
厚い。

キャロル

フレルの妻。活発な美人で、
厳しくも優しくサキ達を
見守る。可愛いものに
目がない。

アネット

フランの二つ下の妹。
サキが大好き。
背伸びしたがりで
おしゃまな性格。

フラン

アルベルト公爵家の子供。
爽やかで優しいが、
実はちょっと腹黒い
ところも…？

レオン

強くて頼れる
サキの先輩。
クロード公爵家の
次男。

オージェ

サキと同じ
クラスの男子の子。
友達思いで何事にも
一生懸命。

ミシャ

気配り上手で
優しいサキの
クラスメイト。

サキ

不幸ばかりの前世を神様に
謝罪され、幼女として
異世界転生した。
桁外れな才能を持つものの、
コミュ障で人見知り。

ネル

女神ナーティ様がくれた
サキのお付きの猫。
様々な魔法でサキを
サポートする。
ちなみに女の子。

アニエ

魔法学園の生徒。
学年一の魔法の実力者で、
勝気なしっかり者。
わけあってブルーム
公爵家の養子に
なった。

★**Characters**★
登場人物紹介

私——あめみやさき雨宮咲の人生は散々なものだった。

幼い頃は酒癖の悪い親に虐待げうたいされ、学生時代にはイジメられ、社会人になったらセクハラ・パワハラハラの連続。そしてしまいには雷に撃たれて死ぬという酷すぎる幕引き……。

しかし、死んだはずの私の目の前に現れた女神ナーティ様が言うにはどうやらその不幸な人生は手違いだったらしい。ナーティ様にたくさん謝られた後、お詫びとして私はチート能力を与えられ、銀髪美少女サキ・アメミヤとして異世界に転生させてもらえることになった。

こうして異世界で始まった第二の人生は、家族の愛情に恵まれた、とても幸せなものだった。身寄りのない私を養子候補として迎えてくれたのは王都エルトの貴族であるアルベルト公爵家きうくわくけ。前世の経験から人を信じられなくなっていた私は、そこで温もりを知ったの。当主であるフレル様をパパ、その奥さんのキャロル様をママと呼ばせてもらっていて、二人の息子でクール系イケメンなフランや小さくてかわいい娘のアネットとも仲良し。たまにちよつと過保護かもしれないと思う時があるけど、すごく大切にされているってわかるんだ。

また、家族の後押しもあって私は魔法を学ぶためにフランやアネットとともに学園に通い始めた。そこで、ブルーム公爵家の養子で炎魔法と風魔法を使いこなす赤髪の女の子アニエちゃん、実家が服屋を営んでいて青髪とメガネがトレードマークのミシャちゃん、ムードメーカーで強力な雷魔法が使える金髪の男の子オージェと仲良くなり、学園生活を謳歌おうちかしている。

この前は学園の課外授業でアクアブルムっていうところに行つたんだけど、あの時はちよつと大変だったなあ。暴走する巨大海洋生物クラーケンが現れて、それをみんなで倒したんだよね。でも

そのお礼に、魔力を込めれば魔物を従魔として召還できるアクセサリをもらったの。

そんな騒動からしばらくして、学園代表戦が行われた。

学園代表戦というのは王都エルトの魔法学園と、交友のあるバウアの魔法学園の優秀者を集めて模擬戦を行うイベントのこと。

その選手に選ばれた私は、同じく代表に選ばれたクロード公爵家次男のレオン先輩や他の先輩と代表戦に臨んだんだけど、そこに国家反逆組織リベリオンの邪魔が入った。でも、レオン先輩と一緒にリベリオンの幹部と戦ってなんとか退けることができた。とはいえリベリオンの目的や組織の規模など、まだまだわからないことだらけなんだよね。

不安なこともあるけれど、頼もしい家族や友達、先輩のおかげで、私は今日も幸せに生きています！

1 魔術師の理想の戦闘

学園代表戦が終わって二週間が経ち、学園は長期休暇、春休みに入った。

私が王都に来てからもう一年かあ……なんだか感慨深いなあ。

私は朝の日課であるネルとの魔法の修業を終え、お風呂に入って部屋でくつろいでいた。ネルはナーティ様からもらった特別な猫。色々なことを教えてくれる、頼れる家族だ。

「はあ、それにしても最近は武術も魔法もマンネリ化してきちゃって……新鮮味がないよお」

『仕方ありません、サキ様はすでにネル流武術を自分のものにしていきますので。魔法やスキルにしても、そう簡単に新しいものは作れません。サキ様の【習得の心得】は原理を理解しなくてはいいのですから。そもそも魔力解放の会得が早すぎたのです……』

私がベッドにごろんと横になりながら呟くと、ネルも自分のクッションの上でくつろぎながら、頭の中に直接話しかける魔法【思念伝達】で答えた。

この世界には炎、水、風、雷、土、草、光、闇、空間、治癒、特殊の十一種類魔法属性があつて、生まれつき魔法が得意だと言われている貴族ですら五、六種類しか使えない。だが、ナーティ様からチート能力を授けられた私は全種類の魔法が使えるのだ。

また、魔法は繰り返し使用して経験を積むことでスキル化し発動過程を簡略化したり、オリジナルの魔法を生み出したりもできるんだけど……今ある魔法はもうだいたいぶ極めてしまっている。

さらに、スキル化した魔法は強さや難しさによって第一から第十まであるナンバースに分類され、どのランクの魔法も一度発動できればその後もずっと使えるようになるのだ。

それだけでなく魔法の飛距離を伸ばす【ア】、速度を速くする【ベ】、効果時間を伸ばす【セ】、操作性を高める【デ】といったワーズや、魔法に複数の属性を付与するエンチャントなど、魔法を構成する要素は様々だ。

これだけ色々な技を覚えられたのはやっぱり、習得の心得のおかげだろう。習得の心得は魔法や武術のスキル化を簡単にしてくれる常態スキル。常態スキルは無意識かつ恒常的に発動するスキ

ルだ。

ネルの持つ膨大な知識を活かし、数ある武術の型の中から私に合うものだけを組み合わせ作り上げた戦い方であるネル流武術や、体の魔力を増加させて、身体能力に加え、脳の機能を向上させる技、魔力解放も既にモノにしてしまっていた。

そんなこんなで今はやれることがないから、完全に目標を見失っている状態なんだよね。

「うーん、それはそうなんだけどさあ。レオン先輩は私の武術を自分の戦い方に組み込んでどんどん強くなっていつているのに私は成長できていないっていうか……」

私は大きいため息をついた。脳裏に浮かんだのは学園でよく一緒に修業をしているレオン先輩のこと。

先輩はネル流武術の型を教えた翌日には新しい技を生み出して私との修業で試してくるんだよね。それに比べて私は、現在ある武術スキルを磨くことと、使いどころや組み合わせなんかを考えることくらいしかできていない。

新しい魔法に関するアイデアもないし。

レオン先輩に置いていかれてるみたいで、なんか嫌だな……。

『……では、増やしてみますか？ 新しい魔法』

「え？ できるの？」

ネルの言葉を聞いて、私はがばつと起き上がった。

『はい。しかし、サキ様が思っているようなものではないかもしれませんが』

「それでもいいよ！ 教えて！」

『では、庭へ行きましょう』

「うん！」

私はネルと一緒に、庭へ向かう。

朝の特訓が終わった後にお風呂に入っちゃったけど、そんなのは些細な問題だ。

新しい魔法にワクワクしながら私は庭に出た。

『サキ様、魔術師にとつて最も理想的な戦闘とは何かわかりますか？』

ネルに急に聞かれて私は少し考え込む。今までの戦いを思い返しても『理想の戦闘』ができていたとは思えない。っていうかそもそも魔法使いの戦い方なんて十人十色なのに、たった一つの理想なんてあるのだろうか。

「うーん、すごい魔法をどかーんって出して圧勝！ みたいな？」

私が身振り手振りを交えて伝えると、ネルに呆れたような顔をされた。

『魔術師としての最も理想的な戦闘、それは相手に気付かれない位置、もしくは相手が攻撃できない位置から強力な魔法を放つことです』

え？ それだけ？

いや、でも今までの戦闘を思い返してみよう。

リベリオンの幹部ミシユリーヌやグレゴワール、学園代表戦で戦ったロイさんも、最初は必ず距離のあるところから攻撃をしていた気がする。

『武術や剣術など、近距離においての戦闘ができないと、一対一の戦いでは不利になってしまします。ですから私はサキ様に魔法と共に武術の訓練をしてきました。しかし、最近のサキ様はレオン様との訓練により武術にばかり目がいつています』

「う、それは……」

『張り合うのは良いことですが、もつと魔術師としてのスキルアップを目指して……』

図星を指されてたじろいでいるとネルがお説教を始めそうだったので、私は無理やり話を切る。

「じゃ、じゃあどうするの？ フランや代表戦と一緒に戦った時のリンダさんみたいに姿を隠すとか？」

『確かにあの二人の闇魔法、特にフラン様の召還従魔であるウイムによる【クリフフラインド 姿眩まし】は魔術師の理想と言っても過言ではありません。姿を消して一方的に魔法を撃てるわけですから』

「なるほど。でも、私の従魔のクマミは闇魔法を使えないし……」

『はい、ですからサキ様には別の方法を使ってもらいます』

「別の方法？ 何するの？」

ネルは一拍おいて、私を見つめながら告げる。

『空を飛ぶのです』

「へ？」

私はあまりにも唐突な内容に変な声を出してしまった。

『今からサキ様に覚えていただく魔法は、【くうちゆうぶ 空中浮遊】。つまり空を飛ぶ魔法です』

空を飛ぶって、鳥みたいに？ 何それ、そんなことが可能なの？

いや、でも空を飛べれば、ネルの言っていた魔術師の理想に近づける。

それに、空を飛ぶなんて楽しそう！

『サキ様。今、空を飛べたら楽しそうとか考えてませんでしたか？』

「え!? そ、そんなことないよ！ それより、早くやり方を教えてよ！」

またもネルに図星を指されたので話題を変える。

『……一口に空中浮遊と言っても様々なアプローチがあります。空を飛ぶという結果は変わりませんが、その方法によって原理は大きく変わるのです』

「飛ぶなら一緒にじゃないの？」

『まったく言っていないほど違いますよ。例えばサキ様は先ほど、空を飛ぶという言葉聞いて、何を想像されましたか？』

「うーん……鳥かな。あとは蝶々とか？」

『では、鳥のように飛んでみましょう』

「え？ でも、私に翼なんてないし……」

『魔法で翼を作ります。どの属性かはサキ様のイメージにお任せいたします』

「ええ？ うーん、とにかくやってみるね……」

翼……イメージできるのは天使みたいな白い羽だけど、どの属性かと言われると難しい……。やっぱり風の属性なんかいいんじゃないかな？

「第五ウィンド」

天使の羽みたいな翼を風魔法で背中に作るイメージ……。すると、背中に風属性の魔力でできた白い翼が生えた。

なんかほんのちよつと体が軽くなった気がする！ 意外と上手くできたかも！

「やあ」

「サキー」

「お姉さまー」

私が試しに翼をパタパタとさせていると、フラン、アニエちゃん、アネットが庭に出てきた。アニエちゃんは今だけアルベルト家で生活しているんだ。

というのも、彼女が養子として身を寄せているブルーム前当主のベルニエ家は、実子であるアンドレが違法な薬を使ってしまったことが問題になって公爵家から降格させられてしまったの。そのゴタゴタにアニエちゃんが巻き込まれないよう、パパがアルベルト家に一時的に引き取ったのだ。

「お姉さま、おはようございます。その翼は？」

「サキ、もしかして空を飛ぶ魔法を覚えようとしてるなんて言わないわよね……？」

アネットとアニエちゃんが尋ねてくる。

「うん、そうだよ。ネルがやってみる？ つて言うから……」

「はあ……あのねサキ、空を飛ぶ魔法は世界中の魔術師が知恵を絞っても成しえていない、魔術難問の一つなのよ？」

「魔術難問？」

初めて聞く言葉だ。まあ、なんとなくわかるけど。

フランが説明してくれる。

「魔術難問っていうのは発動したくても、何かしらの欠陥があつて魔法として成立しない魔法のことを言うんだ。例えば、サキがやろうとしている空を飛ぶ、つまり空中浮遊の魔法なんかがそれに当てはまるね」

そうなの？ 意外と簡単そうなんだけど。だつて実際、翼は作れたし。

後はこれをパタパターつて動かし続けられただけでしょ？

「空中浮遊の定義は『一時間以上空中に留まること』だからね。学園対抗戦でラロック先輩は風魔法で空中を動き回っていたけど、あれを一時間続けるのは難しいだろうね」

さらに詳しく教えてくれるフランに、私は頷く。

「とりあえずやってみる……」

イメージはこの翼を鳥さんみたいに……。

私は風属性の翼をバサッバサッと大きく羽ばたかせてみる。

体がさらに軽くなったような？

それから私は膝を曲げて、大きくジャンプした。

「わ、わわ……」

翼を動かしていると、私の体は五十センチほど浮かび上がる。



でも、体が安定しないから手足が少しバタバタしちゃう……。

「ま、まさかほんとにできちゃうの？」

「いくらサキでも魔術難問はさすがに……」

「お姉さま、飛んできますわ！」

アニエちゃんとフランは信じられないものを見たような表情をし、アネットは目を輝かせている。でも、これなら一時間くらい……うつ。

そこで、なぜだか急に気持ち悪くなって集中力が保てなくなってしまう。翼が消えて地面に落ちてしまった私を心配して、三人が駆け寄ってくる。

「お姉さま!？」

「サキ！」

私は戻しそうになり、片手で口を押さえながら下を向いた。

「うう、気持ち悪い……」

『このように翼で飛ぼうとすると体が何度も揺れるので、気分が悪くなってしまう人もいます。』

冷静に解説するネルを、私はジトーと見つめた。

そういうことは早く言って！

その後、私はアニエちゃんに肩を貸してもらってなんとか自室に戻ることができた。

「サキ、大丈夫？」

「うん、だいぶ楽になったよ」

心配そうに尋ねてくるアニエちゃんに、私は答えた。

ベッドでしばらく横になっていたの、かなり楽になった。なんとか笑顔を作ると、アニエちゃんは大きなため息をつく。

「まったく……いつも無茶ばかりして」

その時、扉がノックされてパパの声が聞こえてくる。

「サキ、ちょっといいかな」

「はい」

部屋に入ってきたパパはアニエちゃんを見て言う。

「アニエもいたのか。お邪魔だったかな？」

「いえ、大丈夫です。私はもう魔法の練習に行くので」

「そうか、すまないね」

「それじゃあ、失礼します」

アニエちゃんが部屋を出ていった後、パパは彼女が座っていた椅子に腰を下ろす。

「サキ、体調でも悪いのかい？」

「えっと、魔法で翼を作って空を飛ぼうとしたら、気持ち悪くなっちゃって……」

「翼？ 空を飛ぶ？ あはは！ そうか、魔術難問を解こうとしたのか！」

私の話を聞いて、パパは楽しそうに笑った。

「懐かしいな。僕たちも昔、空中浮遊の魔術難問を解こうとしたんだ。僕とキャロルとミシユだね。風魔法を使える僕が二人に迫られて挑戦してみたんだけど、僕も気持ち悪くなって五分と持たなかったよ」

昔を思い出したのか、パパは苦笑して言った。

そういうば、ミシユ——私が戦ったリベリオンの幹部のミシユリーヌとパパたちはもともと仲良しな同級生だったんだよね。

「私は一分もできなかった……」

「サキはまだいい方さ。気持ち悪くなったら友達がベッドまで運んでくれるんだからね」

「……？ パパは？」

「二人にもう少し頑張りなさいよ！ 情けないわね、つて言われながら蹴られたよ」

ママとミシユリーヌ、公爵子息に何してるの!?

驚いている私を見て、パパはまた笑った。しかし、すぐに真剣な表情を浮かべて尋ねてくる。

「サキ、今の生活は楽しいかい？」

「え？ うん、みんな優しくて……楽しいよ」

「それはよかった。サキ、今から話すことはとても大事なことで。だからこそ、サキの意思で判断してもらって構わない」

パパはさらに続ける。

「サキ、実は今、いろんな侯爵家が君のことを探^{さぐ}っているという情報が入っているんだ。おそらく、君を自分の家の養子にするためにね」

「え？」

「ブルーム家が問題を起^{おこ}して降格させられたために、今その分の公爵の枠^あが空いているだろう？ 一つ格下の侯爵^{こうしやくけ}家はその枠を狙^{ねら}って動いている。基本的に高い爵位には、保有する戦力や国に対する貢献度が大きい家から順についていくもの。そこで目をつけられたのがサキ、君だ」

「私？」

「そう、ここ最近のサキの国に対する貢献は、正直言^{まこと}って僕の想像を超えるほどのすごいものだ。もちろん、僕は報告を聞くたびに誇^{こほ}らしい気持ちだった。でも、その働きは他の貴族にまで広まっ^{ひろ}てしまった……仮にどこかの侯爵家が君を養子にできたなら、その家は公爵に一步近づくと^いえるほどにね」

「……」

「そうか、私は気が付かないうちにこの国に影響を及ぼしていたんだ……」

「パパ、私のせいで迷惑をかけてしまっ^まてごめんなさい……」

「サキ、君はこんな時まで僕のことを心配しているんだね。君は賢く、優しい子だ」
「そう言^いってパパは私を抱きしめる。」

「僕は君を守りたい。だからサキ、僕の娘にな^なってくれるかい？」

私はまだ正式にアルベルト家の養子にな^なっていない。

パパからすれば今の私は一年前の私よりも面倒な存在にな^なっているだろう。

それでもパパは私に、「家族にな^なろう」と言^いってくれているんだ。

一緒に過^{すご}してきた今なら、パパを心から信じられるよ。でも、だからこそ聞^きかなきゃいけないことがある。

「パパ……私を森から連れてきた責任を果たさなきゃいけないって、考えてない？」

「そんなこと考えるものか。僕は君を屋敷に迎えた時から、フランやアネットと同じ、自分の子供のように思^{おも}っている。だが結果、君を政治の道具のように扱^やう輩^{から}に狙^{ねら}われることになった。そんなことは絶対に許さない。絶対に……」

私を抱きしめるパパの手に込められた力が強くなる。

こんなにも優しい人に拾^{ひろ}われて、私は幸せ者だなあ……。

私はパパの体から少し離^{はな}れて、彼の顔を見つめた。

「どうか私を娘にしてください……パパ」

「サキ！」

一年前は戸惑^{戸まど}いが大きかったけど、今は違う。私は微笑^{ほほえ}んで返事をする事ができた。

パパは再び、私を抱きしめる。

家族になることに大きな心配はない。今回のパパの言葉を聞いたことで、私はよりアルベルト家の一員になりたいと思^{おも}えた。

将来、貴族家として公務に就^つけるような人間になれるかはわからないけど、この人の家族でいら

れることは、本当に光栄で幸せなことだと思うから……。

2 アニエの目的

私がアルベルト公爵家の養子になると決めた次の日の夜。

「それではみんな、今日は盛大に盛り上がってくれ。乾杯！」

「「かんぱーい！」」

パパの音頭でみんな手に持っていたグラスを掲げ、拍手をした。

今日はお屋敷の関係者だけで、パパの家督継承のお祝い会が開かれている。

いつも私が魔法の練習をしている広い庭には机が並び、美味おいしそうな料理や飲み物がいっぱい載せられていた。

普段はキリツとしている警備の兵士さんも、忙しいメイドさんも、今日は一緒に飲んだり食べたりしている。

アニエちゃんに聞いたけど、他の公爵家はこんな賑にぎやかにお祝いをするのではないそうさ。

一週間後、王様の前で行われる公爵家督継承の儀を以て、パパは正式にアルベルト家当主として公務にあたることになる。

そして、その後に私はパパの養子として、正式にアルベルト家に迎え入れられる。

昨日の話を聞いて、この人の娘になれるなら頑張れる……そう思ったけど、養子になって変わることもあるのだろうか。

少しだけ不安になってきた……。

「何浮かない顔してるの」

両手に飲み物を持ったアニエちゃんが歩いてきて、私の隣に座った。

「飲み物持ってきたわよ。オラジとブーグレ、どっちがいい？」

アニエちゃんはそう言っ、手に持っている飲み物を私に差し出してきた。オラジがみかん、ブーグレがぶどうだ。私はお礼を言いながらオラジのジュースを受け取る。

「養子になるのが不安？」

「え？」

アニエちゃんに考えていることを当てられてドキッとする。

まさかアニエちゃんは相手の考えを読める魔法を……。

「サキ、今私が魔法で考えを読んだんじゃないかって思ったでしょ？」

「ええ!？」

やっぱり魔法だよ！ 全部バレてるもん！

「ふふふ、そんな魔法使えるわけないでしょ。相手の思考を読む……【超高度読心術】は空中浮遊に並ぶ魔術難問よ」

「そ、そうなんだ……。じゃあ、なんでわかったの？」

「私と同じ顔をしてたから……かな」

「え？」

「ほら、私も養子の身でしょ？ ブルーム家の養子になるって決まってる、さあ明日からは立派なお屋敷で暮らすんだ！ って日の夜に、自分の顔を鏡で見てびっくりしたわ。お化け!? って思うくらい顔は真つ白。表情も暗いし、こんな私が公爵家でやっていけるのかなあって不安だった」

そう言ってる苦笑するアニエちゃんに、私は尋ねる。

「ねえ、アニエちゃん。一つ聞いてもいい？」

「何？」

「どうして公爵家の……ブルーム家の養子になる話を受けたの？」

アニエちゃんはブルーム家であまりいい扱いを受けていなかった。それなのになんでアニエちゃんは公爵家の養子の話を受けたんだろうってずっと気になっていたのだ。

養子になるためには本人と親の同意が必要だ。

だから、アニエちゃんは自分の意思で養子になっているはずなだけだ。

アニエちゃんは真面目な顔になって言う。

「……聞いちゃったら、私のこと嫌いになるかもよ？」

「ならない」

そんなわけではない。これだけは自信がある。私は学園に来てからアニエちゃんが一番の友達だ。今さら何があつたって嫌いにならない。

「即答ね……じゃあ、サキにだけ特別に教えてあげる。私の一番の友達だしね……って何ニヤニヤしてるのよ」

そう言ってるアニエちゃんは右手で私のほっぺをつまんで、うにうにする。

「いひゃいひゃいひゃい」

一番の友達——アニエちゃんも私のことをそう思ってくれていたことがすごく嬉しくて、ついつい頬が緩んでしまった。

アニエちゃんは右手を離すと、「ふう……」と息を吐いた。

「このことはみんなには内緒なんだからね。フランやアネットちゃん、それとミシャとオージェにも」

「うん、約束」

私が小指を出して見せると、アニエちゃんは首を傾げる。

こっちの世界には指切りの習慣がないのか……。

「前に私がいたところでやってたの。約束を守る、おまじない」

「へえ……こう？」

アニエちゃんも小指を出す。

そして私は、自分の小指とアニエちゃんの小指を結んだ。

「ゆーびきーりげんまん、うーそついたらはーりせんぼん、のーます」

私が歌うと、アニエちゃんは驚いたように声を上げる。

「え!? 針千本吞まされるの!」

「ふふふ、私が嘘をついて、アニエちゃんのお秘密を誰かに話したら……ね?」

「そ、そんな覚悟を見せなくても……まあいいわ」

そう言うと、アニエちゃんは夜空を見上げた。

その表情はちよつぱり悲しそうで、何かに想いを馳せているようだ。いつも明るくアニエちゃんとは別人みえた。そしてアニエちゃんは決心したように口を開く。

「私が養子になった目的はね、パパとママの仇を見つけて……殺すこと」

落ち着いた様子で話すアニエちゃんの声は、いつもよりも澄んで聞こえて、私の心に突き刺さった。

「え……?」

「順を追って話すわね。孤児として育った私は、生きていく力をつけるためにどうしても魔法を覚えなかったの。そのためには魔法学園に入学しなければならなくて。ただ私がもといた孤児院から入学するのは、予算的に厳しいって子供ながらにわかっていたわ。孤児院の先生はすごい人だったけど、とてもわがままなんて言える状況じゃなかった」

確かに魔法学園に通うにはある程度お金に余裕がないと難しい。

もとの世界と同じで、学費がかかるのだ。

そして魔法学園に入学してわかったのは、魔法は教えてくれる人がいないと、自分一人で上達するのはとても大変だということ。私にとつてのネルや貴族の子供にとつての家庭教師のように、教

育者がいなければ高いナンバーズや技能を習得するのは難しいのだ。

まあレオン先輩みたいに、通常の十種類の属性以外の属性を持つ魔法——特殊魔法を独学で覚えてしまうような例外もあるけど。そもそも特殊魔法自体、教えられる人が少ないし。

アニエちゃんは続ける。

「でも、私はどうしても魔法を覚えなかった。そんな時に私にチャンスが舞い込んできたわ」

「ブルーム家の養子の話?」

「そうよ。ブルーム家に入ったら、この先一切のわがママを言わないと誓ってでも、魔法学園への入学だけはさせてもらうつもりでいたわ。まあ、私がお願ひしなくても、当主のオドレイ様が公爵家に相応しい教育を受けさせるという方針だったから入学できたけど。私はこうしてブルーム家の養子になったの。そんな時だった。私が捨て子ではなく実はもとと伯爵家の娘で、両親は殺されてしまったんだと知ってしまったのは」

前にフランに聞いたことがある。

アニエちゃんの生家であるオーレル家が、何者かに襲撃されたという話だ。

アニエちゃんは話し続ける。

「それを聞いた時、私の中に黒い……ぐちゃぐちゃした気持ちがあふれてきたの。仲良くパパとママと手を繋いで歩く私と同じくらいの年の子を見るたびに、誰もいない隣を見てしまうようになって。そして私は理解したわ。ぐちゃぐちゃしたこの気持ちは……憎しみなんだろうって。どうして私の隣にパパはいないんだって、どうして私を褒めてくれるママはいないんだって、どうして私は

普通じゃないんだって、取り戻したくても取り戻せない幸せを思うたびにその気持ちは増える一方で……誰に憎しみの矛先（ぼうせん）を向けていいかもわからなかった。だからこの気持ちは私のパパとママを殺した人に向けることにした。魔法を覚えて、強くなって、その人になんでパパとママを殺したのか、どうやって殺したのか、全てを聞き出して、次は私がその人を……殺すんだ」

「アニエちゃん……」

淡々と話すアニエちゃんは驚くほど落ち着いていて、でも覚悟を感じた。

「サキと最初にお昼を食べた時に、努力をする人が好きって言ったの覚えてる？ あれは嘘じゃない。でもね、努力をする『私』は大っ嫌い……こんな汚い気持ちを持っている『私』なんて大っ嫌い……頑張るみんなを見て、みんなの姿に嫉妬（しつと）する『私』が、大っ嫌い……」

そう言って、アニエちゃんは顔を伏せる。

知らなかった。アニエちゃんはみんなのお姉ちゃんみたいで、しつかり者で、努力家で、たまに甘えんぼさんで……私の大切な友達だ。それなのに、こんなにもアニエちゃんが苦しんでいることに、私はちっとも気付かなかった……

そして、アニエちゃんの話聞いても、私にはアニエちゃんの気持ちを本当の意味ではわかってあげられない。

仲の良い親子（おやこ）を羨（うらや）む気持ちはわかる。

前の世界での私の親は酒癖が悪く、虐待してくるような口くでもない人間だったから。ただ、そんなでも私の親だ。その存在に後押しされて努力できた時もあった。

アニエちゃんにはそんな親すらない……どんなに頑張っても『本当の親子』という理想を叶えることができないんだ……。

ずっとアニエちゃんはすごいと思っていた。両親を失い、見知らぬ家の養子になり、周囲のプレッシャーをはね除（の）けて努力をする姿に、私は憧（あこが）れの気持ちさえ持っていた。

でも、その努力の目的は復讐（ふしゅう）だったんだね……。

少しだけ、悲しい……。

黙ってしまった私に、アニエちゃんが尋ねてくる。

「どう？ 私のこと、嫌いになった？」

「ならない」

「また即答なのね」

「でも……悲しいなあ」

私がそう言くと、アニエちゃんが不思議そうな顔をして聞いてくる。

「なんでサキが悲しくなってるのよ」

「私ね……昔、とつても酷（ひど）い目にあってたの。たくさん働いて、たくさん辛い思いをして、それでも幸せになれなくて……親も私の心配なんてしない、むしろ私を傷つける時もあった。そんな時に私を辛い世界から助けてくれた人がいて、その人に言われたの。『復讐（ふしゅう）めいたことをしても、人の心は晴れません』って。私はアニエちゃんが大好きだから……頑張っているアニエちゃんが大好きだから……笑ってるアニエちゃんも怒ってるアニエちゃんも大好きだから。大好きなアニエちゃん

が目的を成し遂げた時のことを考えたら、私はとっても悲しいよ」

「サキ……」

気付けば私の頬を涙が伝っていた。

「サキ、泣かないで？」

「ごめんね……」

「ううん、私が間違ってるの。サキはやっぱり優しいね……それじゃあ、サキにお願いをしてもいいかな？」

「お願い？」

「もし……もし私が間違った道に進もうとしたら、その時は助けてほしいの。サキのことを助けたその人みたいに——お願い」

「アニエちゃん……」

そう言つてアニエちゃんはいつものように優しく頭を撫でてくれた。

でも、その顔はどこか寂しげだ。私は絶対に大好きなアニエちゃんに間違った道を歩ませるものと、強く思った。

「サキ、こんなところにいたんだ。父様が捜して……つてどうしたんだい？」

パパに頼まれたらしいフランが声をかけてきたので、私は首を横に振つて答える。

「ううん、なんでもないよ。今行くね」

私は立ち上がつてパパの方へ向かう。

人込みをすり抜けて、なんとかパパのもとへたどり着くと、パパが尋ねてくる。

「サキ、すまない。使用人のみんなにサキが養子になることを伝えてなかったからね。紹介させてくれるかい？」

「は、はい」

顔いちゃったけどそれって……みんなの前に立つてこと!?

ど、どうしよう！ 急に緊張してきた！

言われるがままパパの後ろについていった先は、パパが最初に挨拶していた台の上だった。

「みんな！ 聞いてくれ！」

パパが呼びかけると、メイドさんや兵士さんなんかが一斉にこちらを向く。

ひい!? し、視線が、視線がこっちに!?

「今回、僕が公爵家当主を継承した後、ここにいるサキがアルベルト家の養子となることが決まった！ みんな、新たな家族を歓迎しようではないか！」

パパがそう言つと、使用人のみんなは『わぁー』と盛り上がつて拍手した。

「サキ様が養子なんて、今日はなんて喜ばしい日なんでしょう！」

「あの嬢ちゃんが加わるとなりゃあ、アルベルト家はもう安泰だな！」

パパの言葉に、使用人のみんなはあちこちで私を歓迎するような声を上げた。

みんなが温かく受け入れてくれるのは嬉しいけど、アニエちゃんの話聞いた後だったから少し心苦しくて、私は複雑な気持ちになつてしまった。

報告が終わって、アニエちゃんのところへ戻ると、さっきの場所にはフランとアネットもいた。アニエちゃんはいつもの雰囲気で二人と楽しそうにおしゃべりしていて、私は少し安心した。

三人は私に気付くと労いの言葉をかけてくれる。

「サキ、お疲れさま」

「お姉さま、素敵でした!」

「これで、サキも公爵家の仲間入りだね」

こうしてお祝いは無事終了した。



お祝いの後、私——アニエは自室へ戻って着替えてからベッドに横になる。

アルベルト家での暮らしにも、今はだいぶ慣れてぐっすりと眠れるようになっていたけど、今日は眠れなそうだった。さっきのサキとの会話が頭をぐるぐると回っていた。

どうしてサキにあんなことを話しちゃったんだろう。

あの子の前だと、隠し事ができなくなっちゃうんだよね……。

そんなことを考えていると、扉がノックされた。

「アニエ、少しだけ話せないかな?」

聞こえてきたのは、フレル様の声。

「はい」

返事をするフレル様は、遠慮がちに部屋に入ってきて言う。

「こんな時間にすまない。今から休むところだったかな?」

「いえ、大丈夫です。なんだか眠れなかったので」

「そうか、じゃあ少しだけ失礼するよ」

フレル様がベッドの近くに椅子を寄せ腰を下ろすと、私は尋ねる。

「話ってなんですか?」

「先日の公爵会議で、王様から次のブルーム公爵家当主の発表があった。詳しくは言えないが、僕の継承の儀の後に、ブルーム家当主の叙任の儀があるはずだ」

「そう……ですか。でも、詳しく言えないっていうのは、どういことなんですか?」

私はブルーム家の養子なのだから、次のブルーム家当主様がどんな人か、どの家の人が教えてくれてもいいと思うんだけど。

「それが、僕も詳しくは教えてもらっていないんだ。ただ王様が『お前ら、楽しみにしろ。絶対驚くぞ』って……」

「ははは……あの王様らしいですね」

王様とは公爵家の子供の集まりで何度かお話をさせてもらったことがある。遠くから見上げていた時は威厳があって近寄りがたいイメージだったけど、私たちの魔法を楽しそうに見たり、王子様

や姫様と笑顔で会話していたりする様子を見ると、気さくない人だと思った。ちょっと子供っぽいとも思ったけど。

フレル様は苦笑して言う。

「まったく、困ったものだよ。他の公爵家の当主にも聞いたが、どうやら誰にも教えていないみたいだね。ただ、近々君はブルームの屋敷に戻ることになりそうだ」

「わかりました……」

「不安だろうけど、王様は何よりも民のことを考える人だ。きっと今回教えてくれないのは、いつもの悪戯（わるいたづら）心だと思うけどね」

そうだ、あの王様の判断なのだからきつと悪いことにはならないだろう。

「サキやフラン、アネットちゃんと暮らせなくなるのは少しだけ寂しいですね」

「離ればなれになるわけではないんだ。いつでもうちに遊びに来たらいいさ」

優しく微笑みながら言うフレル様に、私は頭を下げる。

「ありがとうございます。お世話になりました」

「こちらこそ、君がいてくれたおかげでサキもフランもアネットも楽しそうだった。特にサキ……あの子は君のことがとても好きなのだからね」

「フレル様、一つ聞いてもいいですか？」

「なんだい？」

「サキって、何者なんですか？」

自慢（じまん）じゃないけど、サキが来るまでは私は学年の中で魔法も成績も一番だった。そんな私ですらサキの足下にも及ばない。それどころか国家反逆組織リベリオンと戦えるサキは遙（はるか）か高みにいるのだ。言い方は悪いかもしれないが、普通ではない。

フレル様は真剣な表情を浮かべて聞いてくる。

「アニメはサキについて、どんな風に聞いているのかな？」

「フランには両親に捨てられて、森で猫と一緒に暮らしていたと聞きました。それまでは周りの人から酷い目にあわされていたって……それ以外に具体的なことは何も聞いていません」

「そうだね。実は、フランにも詳しいことは教えていない。いや、僕たちもサキに関してはわかっていないことが多いんだ。ただ、最初は『人』に対してとても臆病（おくびょう）でね……そんな彼女を放っておけなくて僕は一緒に来ないかと誘ったんだよ。そうだな……賢い君なら、これは教えても大丈夫だろう」

「何をですか？」

「サキのスキルについてだ」

サキは魔法もすごいけど、様々な武術スキルと変わった常態スキルを持っていた気がする。前に聞いたのは悪意を見ることができたり、ものを透かして見たりできるスキルだったっけ？

「森にいる時にネルから聞いた話なんだが……サキは精神耐性100%を持っているらしいんだ」

「えっ!？」

精神耐性100%!？ 嘘でしょ!？

精神耐性のスキルは10%を獲得する時ですら、相当なストレスがかかるって本で読んだことがある。

耐性スキルは武術や魔法のスキルなどと違い、肉体や精神に負荷をかけなければ獲得することはできないのだ。

私も何度か自分のスキルを確認したけど、精神耐性のスキルなんてなかった。

教会のスキルボードでスキルは確認できるし……サキが嫌じゃなかったら今度一緒に行ってみようかな。ってそんなことは置いといて、100%という驚異的な耐性スキルをサキが獲得しているのが問題だ。いったいどんな生活をしたら100%なんて数値になるの……？

黙ってしまった私を見て、フレル様は頷いて言う。

「この話を聞いた時、僕も驚いたよ。それと同時に、余計にサキのことが放っておけなくなっ
てね」

「そうなんですか……」

「だから少しずつ人と関わるようになっていくサキを見ていて、すごく嬉しかったんだよ。そして、その一番の功労者はアニエ、君だ」

「え……」

「優秀なサキに唯一弱点があるとすれば、人とのコミュニケーションが苦手なことだ。でもね、学園に通い始めてから少しずつ口数が増えていった。そして、話題の中に何度も君の名前が出てきたよ。優しくて聡明な君がサキと仲良くしてくれているんだと知って、僕はとても感謝していたんだ。

ただ同時に心配もしている」

そこでフレル様は声のトーンを落とした。

「アニエ、僕は昔から君の瞳の中に何か暗いものが見えるんだ……」

フレル様にはサキに話した、私が抱いている暗い気持ちを見抜かれているのかもしれないわね。

前にオドレイ様がボヤいていた。悔しいけどフレル様は、歴代の公爵家の中でも参謀としての才能がずば抜けているって。

そんな人が私みたいな子供の考えを見抜けないわけがない。

「君は賢い子だ。でも、人にはわかっていても間違った道に進まざるを得ない時がある。そんな時、助けてくれるのは友人や家族なんだ。だから、これからもサキと仲良くしてほしい。そしてお互いに助け合って生きてほしいんだ。僕にはそれができなかったから……」

「フレル様……」

「僕からの話は終わりだよ。アニエ、この先どんなことがあっても、僕たちアルベルト家は君の味方だ。もちろんサキもね。だから、いつでも頼ってくれ」

「ありがとうございます」

そこでお話は終わり、フレル様は部屋を出ていった。

私、サキにカッコ悪いところ見せちゃったな……。

私の辛さなんて、サキに比べれば全然大したことないかもしれないのに……やっぱり、サキは強いなあ。

私は複雑な気持ちを抱きながら、ベッドで眠りについた。

3 貴族の装い

お祝い会の一週間後。

とうとう今日は私——サキのパパの家督継承の儀が行われる日だ。

屋敷の中は朝からバタバタと忙しい雰囲気があった。

継承の儀が行われるのは王城前の広場。何か大きなイベントがある時は、だいたいが王城前広場が会場になるらしい。

パパとその父上でありアルベルト公爵家現当主のじいじは先に王城へ向かったので、私たち子供組は後からママと一緒に広場へ向かうことになった。

「お姉さま！ アネットの服、可愛いですか？」

そう言ってアネットは私の前でくると回る。

現在私たちは屋敷の一室で身じたくをしている。

やっぱり貴族はこういうイベントにドレスを着ていくものなんだね。

アネットが着ているのは淡い桃色のフリルがたくさんついたドレスだ。

「うん、とても似合っていて可愛いよ」

私が正直な感想を伝えると、アネットはにつこりとして言う。

「ありがとうございます！」

その時、扉がノックされてフランとアニエちゃんが入ってきた。

フランも普段とは違う格好をしていた。ネクタイをして、なんだかいつもより大人っぽい。

アニエちゃんもドレスを着ていた。

アネットとは違い、フリルが少なめの赤色のドレス姿のアニエちゃんはアネットに向けて微笑んだ。

「アネットちゃん、そのドレス可愛いわね」

「ありがとうございます！ お姉さまにも褒めていただけました！」

「あれ？ サキはまだ着替えてないのかい？」

私の格好を見て、フランが不思議そうに聞いてきた。

「うん。ドレスは用意してあるってクレールさんが言ってたんだけど……取りに行ってから戻ってなくて……」

私が答えると、アニエちゃんとアネットが口にする。

「でも、そろそろ着替えて向かわないといけない時間じゃないかしら？」

「そういうええ、お母さまのお部屋からクレールの話し声が聞こえましたわ」

ママの部屋？ 何をしているんだろう……。

みんなでママの部屋へ向かうと、部屋から屋敷のメイドさんであるクレールさんとママの声が聞

こえてくる。

「ですから、こちらの淡い緑のドレスの方が、サキ様にはお似合いかと！」

「確かに緑も素敵よ。でも、こっちの白の方がサキちゃんの幼さと清純さが強調されて、より可愛さが増すに決まっているわ！」

部屋に入ってみると、ベッドの上には子供サイズのドレスがたくさん並べられていて、ママとクレールさんが服を一着ずつ持ちながらヒートアップしていた。

「ママ、クレールさん。落ち着いて……？」

私が声をかけると、二人はスツといつも通りを装う。

「あら、みんなお揃いで。どうしたのかしら？」

「サキがまだ着替えていなかったたので、ドレスはどうなったのかなってクレールさんを捜していたんですけど……」

アニエちゃんが説明すると、クレールさんとママは手に持っていたドレスを私たちに突き出す。

「サキ様にはこちらのドレスを！」

「いいえ、こっちのドレスよ！」

もしかしてこの二人……朝からずっとドレス選びでもめていたわけ!?

二人はバチバチと睨み合っていたけど、やがてママが息を吐いた。

「こうなったら多数決よ。みんなはどっちのドレスがいいかしら？」

ママの言葉に、私たちはうーん……と悩む。

ややあつて、アニエちゃんが口を開く。

「私は緑かしら？ 普段白い服をよく着ているから、たまには色味のある服を着たサキも見てみたいわ」

その意見に、フランも同調する。

「僕も普段とは違うサキを見てみたいから、緑の方がいいかな」

「ですよね！ そうですよね！ フラン様！ アニエ様！」

嬉しそうにするクレールさんを見て、ママはむむむ……と顔をしかめた。

「アネットは白の方がいいですわ！ お姉さまといえば純白！ このドレスはお姉さまにぴったりだと思いますの！」

ア、アネットの褒め方が恥ずかしい……でも……。

「私も白がいい……かな？」

「そうよねそうよね！ さすがは私の娘たち！」

「ま、まだ三対三です！」

クレールさんが声を上げた。

確かに三対三だけど……私が着るんだから白でよくないかな？

そんな私の考えを他所に再び睨み合う二人。

どうしようかなあ。

「ネルはどっちがいい……？」

私はしゃがんで、後ろにいたネルに聞いてみた。

ネルは一度首を傾げてから、ママとクレールさんの方へと歩き出す。

そのネルをまるで結果発表を見る受験生のように見つめる大人二人。

ネルは二着を交互に見てから白いドレスの前で立ち止まると、床をたししたし叩いた。

「や、やったわぁ！ やっぱりこっちのドレスよね！」

「そ、そんなぁ……」

猫の前でぐるぐる回るママと、両手をついてへこむクレールさん。たかが服選びで大人が一喜一憂している様はなんともシュールだ。

こうして、私のドレスは白を基調とした黒リボンの可愛いドレスに決まった。

「お姉さま可愛いですわぁ！」

「ふふふ……やっぱり私の目に狂いはなかったわね」

王城に向かう馬車の中で私は両サイドからアネットとママに抱きつかれていた。

アニエちゃんは苦笑いを浮かべて言う。

「サキも大変ね……」

そんな様子をいつも見ているフランはやれやれといった様子で首をすくめる。

「まあ、母様もアネットもいつもこんな感じだよ」

「気持ちにはわからなくもないけど」

そう言つてアニエちゃんは外に目を向けた。

「ギャロル様、アネットちゃん、もう着きますよ」

アニエちゃんがそう言つた瞬間、ママとアネットはキリッと姿勢を正した。

毎度毎度ひっくりする……。

ママとアネットは家から出ると凛とした貴族夫人と令嬢なのだ。

広場に到着して、馬車を降りるママとアネットの後ろをついていく。彼女たちの歩き方や立ち居振る舞いは本当に優雅で美しい。

すれ違う貴族の方々へ「ご機嫌よう」とか「お元気そうで、何よりでございます」など挨拶するママも、「しっかりしていらして、ご立派ね」と褒められて「そのように言っていただき、光栄でございます」「私などまだまだでございます」と返すアネットも、いつもの姿からは想像もつかないほど様になっているのだ。

まあ、いつも通り冷静に挨拶をしているフランも、それはそれですごいとは思うけど。

そんな三人とは違い、貴族としての立ち居振る舞いにまったく自信のない私は、アニエちゃんと後ろの方を歩いていた。

すると、突然後ろから声をかけられる。

「ご機嫌よう」

振り向くと見覚えのない男の人が立っていた。

服装を見るに、たぶん貴族だとは思うけど……。

「ご、ご機嫌よう……ございます」

いや、自分で言っておいてなんだけど、ご機嫌ようございますって何!?

やばいやばい、男の人ニコニコしてたのに、今きょんとしちやつてるもん!

一瞬私の挨拶で空気が固まったが、男性は再び笑顔に戻って口を開く。

「お初にお目にかかる。失礼ながらサキ・アメミヤ嬢で間違ありませんか?」

「は、はい」

「そうですか! そなたがあのアクアブルムの英雄サキでしたか! いやあ! 噂は聞いていたが、想像以上の美貌! それに纏っている空気が違う!」

男の人が口にした『アクアブルムの英雄』という言葉で、周囲の視線が私に集まり、手が震えてしまう。

周りからは「あれがああのリベリオンとの交戦で勝利した……」とか色々聞こえてくる。

目の前の男の人が何か話しているけど、内容が入ってこない。

足がすくむ……膝に力が入らない。気のせいかもしれないけど寒気までしてきた。全身に鳥肌が立つ……怖い……助けて。

「ディエネンド侯爵様、うちのサキに何か御用でも?」

体が震え、呼吸が荒くなり始めたところで、後ろからママの声が聞こえた。

ディエネンド侯爵と呼ばれた男性は頭を下げながら、ママに答える。

「これはアルベルト公爵夫人。いえね、巷で有名なアクアブルムの英雄に挨拶へ来ただけです

とも」

「すみません、うちのサキは目立つのがあまり好きではないんです。これで、失礼してもよろしいかしら?」

「そうでしたか。失礼ながらキャロル夫人。今し方、『うちの』とおっしゃっていましたが、サキ・アメミヤ嬢はアルベルト家とどういったご関係で?」

「サキは我がアルベルト家で、子供たちに魔法を教えてくれているんです。おかげでフランもアネットも魔法の技術に磨きがかかっていて、親として嬉しい限りです」

笑いながら話すママは私を隠すように前に立ち、アニエちゃんの方へ軽く押した。

私はふらふらと歩いて、アニエちゃんに受け止められた。

アニエちゃんは私を安心させるように背中をさすりながら尋ねてくる。

「サキ、大丈夫?」

「はあ……はあ……う、うん」

アニエちゃんに触れられた背中に温もりを感じて、少し落ち着いてきた。

改めてママの方を見ると、ディエネンド侯爵様とにこやかに話していた。

でも、あのママの笑顔はちょっと怒ってる……?



「なるほど。ではキャロル夫人、サキ嬢は貴族ではないと？」

しつこく食い下がるディエネンド侯爵に私——キャロルはため息をつきたい気持ちだった。

「そうですね。まだ、ですけどね」

ディエネンド侯爵は今の侯爵の中で最も公爵家への執着が強いわ。きっとサキちゃんを養子にするために近づいたんでしょけど、そうはいかないわ。

あの子を政治の道具になんてさせない。そもそも公爵になるために子供を利用しようとする者が公爵にふさわしいわけがないんだから。

「ほう？ それはどういう意味ですか？ まるでこれから貴族になるような物言いですな」

サキちゃんが養子になるにはフレルが公爵家当主となつてから、正式に国へ手続きしなければいけない。つまり、現段階でサキちゃんはまだ私の娘ではない。

書類手続きは式が終わり次第行つて予定だったけど、その前にサキちゃんがディエネンド侯爵に養子の話を持ちかけられて同意をしようとするわ。

でも公爵家の次期当主が、英雄と話題の女の子を養子にするために家に囲っていた、なんて噂が流れるとちよつと厄介なのよね……だから、まだサキちゃんがアルベルト家の養子になると言うことはできない。

それに、このディエネンド侯爵には怪しい噂が絶えないのよね。ディエネンド侯爵が商談や交渉の場に現れると、なぜか必ずディエネンド家に有利になるようにことが進むとか。

私はディエネンド侯爵に答える。

「あら、ご存じないかしら？ 主人からいくつかの侯爵家の方からサキをぜひ養子にしたいと話が来ていると聞いておりますが。サキはアルベルト家の屋敷に住み込みで家庭教師をしていますから、そうした話はすぐ耳に入りますの」

ここはうやむやにして、逃げ切るしかないわ。

このディエネンド侯爵が怪しい魔法でも使っているのなら、サキちゃんに接触されるのはまずいもの。

侯爵は頷いて言う。

「なるほどなるほど、それではぜひとも我がディエネンド家も候補に入れてほしいものですな」

「ディエネンド侯爵様のところには優秀なご長男がおられるではないですか」

「それは他の侯爵家とて同じでしょう？」

それは確かにそうだけど……意地の悪い返し方だ。

絶対こんなやつところにサキちゃんを渡さないんだから！

「しかし、サキは先ほど申しました通り目立つことが嫌いですので、このような場での挨拶は好ましくないと 생각합니다」

「そうでしたな、それは失礼いたしました。では、後ほど改めて目立たない形でサキ様にご挨拶させていただきますてもよろしいですか？」

もう！ めんどくさいわね！ こっちは早くフレルのところに行きたいっていうのに！

でも、遠回しにでも断っておかないと、サキちゃんに迷惑がかかるわ……。

うう……ここはやっぱり……。

「申し訳ございませんが、私では正確な回答ができません。ですから、私ではなく、主人の方へお願いいたします」

こういう時はフレルに丸投げよ、丸投げ！　こういう腹芸でフレルの右に出る者はいないんだから！

その言葉に、ディエネンド侯爵の眉がピクツと動いた。

フレルは貴族家の間でも噂になるほど交渉や話し合いの類が得意だから、ディエネンド侯爵にとっては厄介な相手に違いないものね。

だからこそ、フレルがいない今のタイミングを狙ってきたのかもしれない。

「いえ、公爵当主のお手を煩わせるわけには……私が直接、サキ嬢に話をさせていただければいいだけの話ですので……」

「サキは私どものことを本当に信頼してくれていまして、他の貴族との窓口になってほしいと言われています。ですから、どちらにせよ主人に話が行きますわ。二度手間は避けた方がよろしいと思いますて」

私がニコニコしながら言つと、侯爵は先ほどまでの余裕の表情を崩す。

「わかりました……機会があればフレル公爵に話を伺うことといたしましょう」

「ええ、そうしていただけると助かりますわ」

ディエネンド侯爵は頭を一度下げ、悔しそうな表情をして人込みの方へ歩いていった。

ひとまずトラブルの芽は摘めたかしらね……。

胸を撫で下ろしてみんなの方へ戻ると、サキちゃんは少し落ち着いたみたい。

「サキちゃん、大丈夫？」

周りに聞こえない程度の声量で尋ねると、サキちゃんはこくりと頷いた。

「もう大丈夫だよ。ありがとう、ママ。かつこよかった」

か、可愛い……今すぐ抱きしめたい……！

た、耐えるのよ、キャロル……ここは公共の場。こんなところで「サキちゃん！」なんて言うて抱きついてみなさい。後でどうなるか考えるだけで恐ろしいわ……。

「それじゃあ、フレルのところに向かいましょうか」

みんなにそう告げて、私は王城へ向かって歩き出した。



色々あったが、私——サキはなんとかパパのいる王城前へたどり着いた。

王城の前に立ってみて、改めてその大きさにびっくりする。

いつもは学園から先端がちらちら見えるくらいだし、王城前はいつも人がたくさんいるから近づくこともなかった。

私が王城を見上げていると、フランが尋ねてくる。

「サキ、どうかした？」

「ううん、ただ、お城がおつきいなあつて」

「国のシンボルだからね。中もすごく豪華だよ」

「フランはそう言うけど、アルベルト家のお屋敷も十分豪華だよ……」

上には上があるんだね。

「さ、フレルが待っているわ。行きましょう」

ママに言われて私たちは城の中へ入る。

入り口にいる警備の騎士さんは、ママの顔を見て会釈をした。

さすが公爵家……王城にも顔パスで入れるんだ。

王城の中に入ると、目の前に広がるのは映画でしか見たことのないような光景だった。

広く長い廊下に、赤い絨毯が敷かれており、天井にはきらびやかなシャンデリアまである。

そんな豪華なお城にもママは慣れっこなのだろう。特に驚くこともなく歩いていく。

その後ろをついていきながら、私はキョロキョロと廊下を眺めた。

高そうな絵や壺や宝石なんかも飾っており、興味をそられてついついフラフラと見に行ってしまう。

そしてふと、右手にあるガラス張りのケースの中に飾られているものに気付く。近づいてみると、そこにあつたのは立派な剣だった。

「きれい……」

剣は鮮やかな朱色の鞘に収められ、銀色の柄には青、赤、黄、緑の宝石がついている。でも、これじゃあ重くて振れないんじゃないかな？

「ねえ、アニエちゃん……ん？」

横を向くと、さっきまでそこにいたみんながいなかった。

もしかして……置いていかれた!?

確かに一番後ろにいたし、勝手に剣を眺めていたんだけどさ!?

どうしよう……どうしよう……

「おい、そこで何をしている」

「びいっ！」

急に声をかけられて、声にならない声が出てしまった。

声の方を向くと、男の人が立っていた。

年齢はパパより少し上かな……

でも、パパとはタイプが違うというか……男らしい感じのワイルドな顔立ちをしている。

「あ、あ、あの……ひ、人とはぐれて」

城への侵入者だと思われるかも……ここは正直に答えないと。

「人とはぐれた？ この家のやつだ？」

「アルベルト家……です」

「アルベルト……名前は何？」

「サキ……」

私の名前を聞いて男の人はニヤツと笑った。

「そうか、お前がサキか」

「あ、あの……」

「ん？ ああ、事情はだいたいわかった。でも、アルベルト家ならキャロルと一緒にいたんじゃないか？ なんではぐれた？」

困惑する私に、男の人が尋ねてきた。

「この剣を見ていて……気が付いたら誰もいなくて……」

「なるほどな。この剣が気になるのか？」

「他のものに比べてケースが頑丈そうだから……重要なものかなって。きれいだったし」

男の人は頷いて説明する。

「この剣はな、この国を作った初代王が持っていたとされる剣だ。特殊な魔法がかけられているらしい。錆びないし、刃こぼれも起こさない」

「そんなにすごい剣なんですね……」

私は改めて剣を見る。そんなに由緒正しき武器だったとは。

「この剣を見て、何を思った？」

「装飾が多いから……重くて振りにくそう」

私が最初に見た時の感想を言うと、男の人は下を向いてぶるぶると震えた。

そして急に笑い出して、私の頭をポンポンと優しく叩く。

「ぶっ……あつはつはつは！ そうかそうか！ そうだよな！ 戦うための道具をなんでこんなに飾ってんだって思うわな！ お前面白いな！ 気に入った！ よし、俺がお前の連れのところに案内してやる。ついてこい」

そう言っただけで男の人が歩き出したので、私は慌ててついていく。

「あ、あの……」

「ん？ どうした？」

「名前は？」

「名前？ ああ、そうだな……よし、俺のことはヴァンって呼べ」

「ヴァンさん？」

「そうだ、今度ははぐれずについてこい。城の中で気になるものがあれば教えてやる」

「は、はい……！」

私は返事をして、ヴァンさんについていった。

「ヴァンさん、これは？」

私は飾ってある壺を指差して聞いた。

「これは水不足で悩む村を助けるために、賢者がその村の村長へ贈った壺だ。水魔法が使えなくても魔力で水が出せるらしい。まあ、本当かどうかわかんがな」

「どうしてわからないの？」